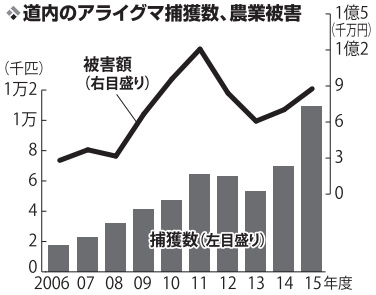
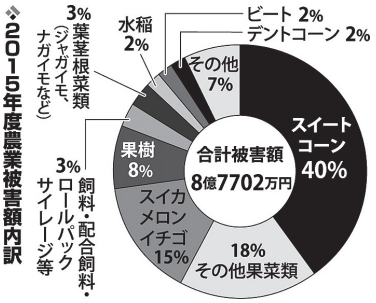




他の動物による被害と混同している可能性がある」とし、潜在的には把握している以上の生息数、被害額があるとみる。

15年度の道内の被害額のうち、スイートコーンに加え、飼料、ジャガイモやナガイモなどの根菜類、ビート、飼料用トウモロコシが多くを占める。これらは十勝でも生産が盛んだ。

研究によると、十勝のアライグマは１歳での妊娠率が約90％で、他地域の60％を上回る。また、１匹の出産数が4.9匹と他地域より１匹多い。十勝はアライグマにとってすみ良い環境で生息数が増えやすいと言われる。

２月にも対策会議設置

管内では来年２月にも自治体関係者や研究者による対策会議を設置して対策に本腰を入れる。同課は「十勝は農業が基盤で、早く対策を打たないと被害が大きくなる。もし見つけたらすぐに市町村に連絡してほしい」と呼び掛けている。

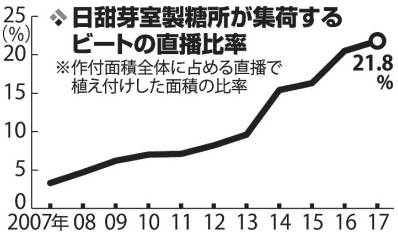
＜アライグマ＞

北米が原産で、テレビアニメの影響もありペットとして導入されたが、気性の荒さから飼いきれず放されたことで野生化した。繁殖力が強く、一度の出産で平均４匹を産み、２歳以上の妊娠率は90％以上になる。道内での生息拡大は1979年に恵庭市で10匹が逃亡したことがきっかけの一つとされる。農業への被害のほか、在来種が捕食、駆逐される懸念がある。外来生物法による特定外来生物に指定され、飼育、運搬、保管などが禁止されている。

ビート直播広がり　人手不足反映　２割超す

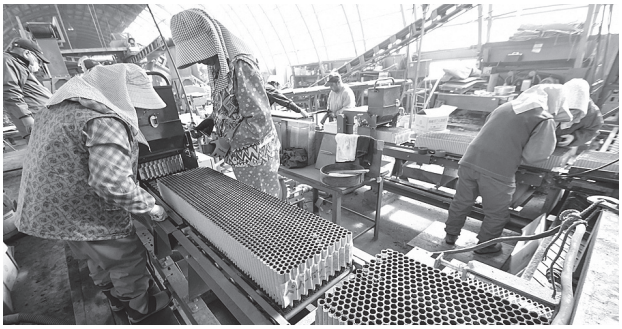
2018年１月17日

人手不足を背景に、十勝管内の農家でビートの植え付け作業を簡素化する動きが広がっている。ビニールハウス内で発芽・生育させた苗を畑に移植する方法が大半だったが、畑に種を直接まく「直播（ちょくはん）」に切り替える農家が増加。2017年産の作付面積に占める直播の比率は、ホクレン清水製糖工場で初めて２割を超えた。直播は手間がかからない半面、収量が天候に左右されやすくなることが懸念材料だ。



管内で主要作物のビートは通常、３月に苗作りを始める。ペーパーポット（紙筒）に土と種を入れてハウス内で栽培し、ある程度生育した４月下旬以降に、機械で畑に植える。「苗移植」と呼び、春の強風や霜の被害を低減する狙いだ。

一方、直播は根付く前に風で飛ばされたり生育不良になったりしやすい。管内の作付面積に占める直播比率は長く、３％程度だった。収量も苗移植に劣り、16年に強風で種をまき直した農家も少なくなかった。



ペーパーポットに種子と土を詰める苗作り作業。一方で種子を直接まく農家が増えている（2017年３月、幕別町）

ただ、ここ数年で直播比率の上昇は鮮明だ。収穫したビートを受け入れる管内の製糖３工場では、日本甜菜製糖芽室製糖所が13年産まで10％以下だったが、16年に初めて20％を突破し、17年は約22％だ。清水製糖工場も16年の17％台から一気に20％強に上昇した。

北海道糖業本別製糖所はここ数年、約40％で推移している。この結果、管内の３製糖工場すべてで直播比率が２割以上となった。

苗移植より少ない手間

直播が広がる理由について、工場関係者は「農家の人手不足が大きい」と口をそろえる。苗移植では作業の開始時期が早く、移植の際も１人では負担が重い。ビート栽培の面積当たりの労働時間は小麦の４倍前後とされ、「移植用の農機を更新するタイミングで直播に切り替える農家もあるようだ」（日甜の担当者）。

17年産ビートは収量、糖度とも出来が良かった。北糖の担当者は「豊作の年は苗移植と直播の収量差が縮まる傾向がある。今年は直播比率がさらに高まる可能性がある」と指摘する。

手間がかかるとはいえ、ビートは管内の輪作体系を維持する上で欠かせないとの声は多い。「葉の部分が土の栄養分になり、畑の地力を保つ役割がある」（管内ＪＡ